連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「メルシオール・ヌーネス・バレト 大名・松浦隆信と外交駆け引き」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2024年4月19日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

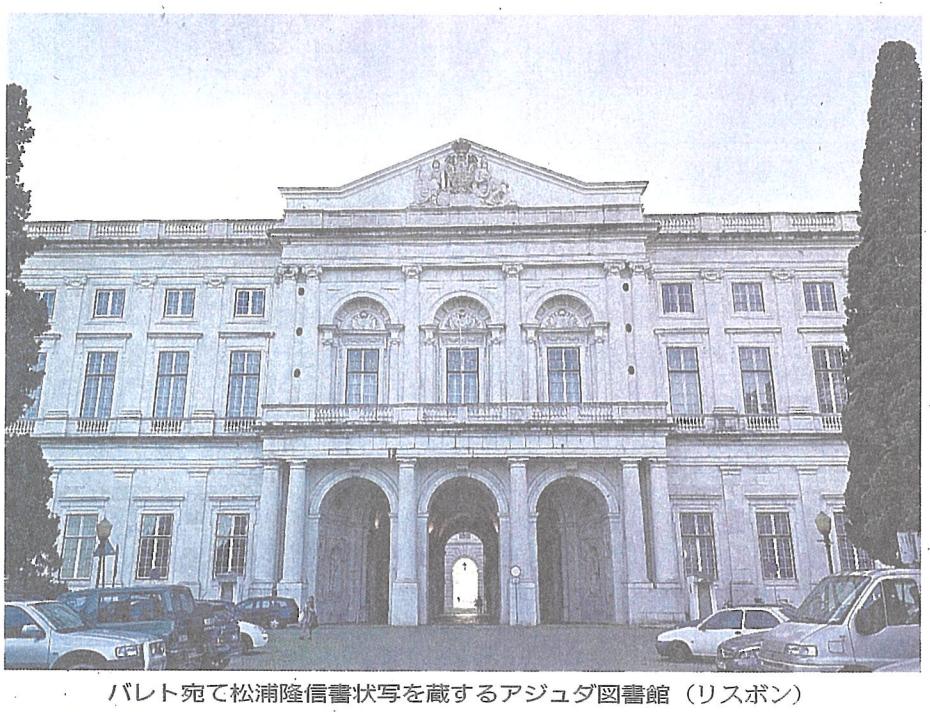
ポルトガルのリスボンにあるアジュダ図書館が蔵する古写本の中に、平戸の大名松浦隆信が、インド管区副管区長メルシオール・ヌーネス・バレトに宛てた1555年10月16日付の書状写があります（「日本関係海外史料　イエズス会日本書翰集」訳文編2・下）。バレトは、ポルトに生まれたイエズス会士で、51年にポルトガル領インドに派遣され、5年後の56年に来日した人物です。

「パードレ（司祭）・メストレ・フランシスコ（ザビエル）は、この私の領地に来て何人かの者をキリスト教徒にした。これについて、私は大変喜び満足している。私は彼らに大いに保護を与え、いかなる害をも彼らに加えることを許さない。また同様に豊後からパードレ（バルタザール・ガーゴ）が二度来た。同様に彼は私の親類数人と、他にも高貴な身分の者多数をキリスト教徒にした。私は彼らの教理および講話を数回聴聞し、これを甚だ良いと思って心に留め、キリスト教徒になろうとしている。私は尊師が当地に来れば、大いに喜ぶであろう。なぜなら、私は先に一度欺いたけれども、再びそうすることはないからである。そして、尊師は能う限りの名誉と厚遇を私から受けることになり、神のために多くの奉仕をすることになるであろう」

天文18（49）年に来日したザビエルが肥前の平戸を訪れたのは、翌19（50）年で、この時、隆信に面会しています。しかしながら、その後、ザビエルは周防山口を経て京都へと向かいました。イエズス会としては、日本での布教活動を庇護し得る有力な政治権力を誰に求めるか、いまだ外交のチャンネルを模索する段階でした。

一方の隆信も、曹洞宗への信仰があつく、キリスト教の「教理および講話を数回聴聞」したと強調するものの、書状に記す「保護」「厚遇」などの文言は、

メルシオール・ヌーネス・バレト
大名・松浦隆信と外交駆け引き



バレト宛て松浦隆信書状写を蔵するアジュダ図書館（リスボン）

バレトを平戸に招くことで進展するであろう、対西欧の外交と交易を主眼とした取引の言葉として解釈できます。

この書状写の末尾には、バレト自身のただし書きが添えられており、「私（バレト）は、彼（隆信）が私に約束していることを否定できないように正真正銘の書翰を日本へ持参します」とあります。キリスト教布教への保護・厚遇を確実に履行させるため、書状原本を携えて来日したのです。50年代における、戦国大名とイエズス会パードレの外交上の駆け引きを証する、興味深い史料です。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

＝月1回掲載＝